私の学びと税のつながり

神奈川県立平塚江南高等学校　２年
鈴木　瑚々

今年の春、私とクラスメイト達は新しい学年の教科書などを自分でお金を持ってきて学校で購入した。その時に私が思ったことは、想像していたより高いな。だった。その前の年も同じようなことを思っていた気がした。高校生になってアルバイトを始めた私にとって教科書代の何万円が何時間も働かないと手に入らない額であり、それは親のお金であっても学校の教科書に払うのは少しもったいないと思った。そう思ったのはきっと、小・中学時代に教科書類や学校の必需品のほとんどが税金のおかげで使うことができていたというギャップもあったからであろう。

小・中学校のとき新学年になったら先生から新しい教科書が配られて自分で裏に名前を書く。このような一連の流れを当たり前のように行っていた。しかし、この当たり前も税金がなければ、今と同じように毎年何万円もする教科書を自費で購入しなくてはならない。教科書は無償で配られるということが当たり前ではなくなった今、改めて私たちの学びに対する税金のありがたみが身に染みた。私は小・中時代に無償で配られたものを有料の場合と同じように扱ったり使ったりできていたのだろうか。過去に戻ることはできないが、今は小・中学生の妹達に税金で賄われる教科書等をもっと大切に有効に使ってほしいと感じるとともに、私自身も親に買ってもらった教科書等をその代金の価値と等しくなるくらい勉強して使っていきたいと感じた。

そんなある時、母から大学無償化制度についての話をされた。多子世帯の大学等の授業料、入学金を所得制限を設けずに無償化するという制度だ。私は六年制の大学に通いたいと思っていたので、全額無償化ではないが学費を心配していた親は大変喜んでいた。この制度は税金や教育国債で賄われている。自分の将来のため、学びたいことを学ぶための大学進学にも税金に助けられている。留年するとこの制度は打ち切りになってしまうため、自分で決めた将来への道は親にも税金にも様々なものに助けられているということを自覚し学んでいく姿勢を止めずにいたい。

私の学びはずっと税の恩恵を受けてきた。国中の人々の税が私たちに期待を込めて、私たちの学びの材料となっている。このことを忘れず、これからもたくさん学んでいつか社会や人に恩返しをしていきたい。また、私が大人になって今より多くの税を払うとき、その税がこれまでよりも、もっと良い学習支援や平等な支援に正しく使われていることを願う。